

# 19世紀終盤から20世紀初頭ロシア帝国のアルメニア・カトリック公認宗教化における公認化プロセスの解明について

石本 雅之

大阪市立大学大学院 文学研究科 哲学歴史学専攻

東洋史学専修 前期博士課程2年生

**Keywords:** ロシア帝国, 宗教行政, アルメニア・カトリック, コーカサス, ローマ教皇庁

## 1. はじめに

18世紀後半以降におけるロシア帝国では、少ない資源で広大な領土と多様な人間集団を統治する必要があった。そのため、帝国はカトリックやイスラーム、仏教など既存の宗教・宗派を公認することと引き換えに、その宗教体制を帝国の行政や外交に好ましいように「操作」しようとした。こうして帝国に最後に公認された宗派がアルメニア・カトリックである。この宗派の信徒は、一般的なカトリック（ローマ・カトリック）とは異なるアルメニア風の典礼や宗教秩序を維持していた。アルメニア・カトリックに関する先行研究では、他の宗教・宗派に関する研究と比較して、同宗教が公認される際にロシア帝国が一枚岩であるような表象がおこなわれていた。本研究では、19世紀終盤における帝国の構造をより理解するために、アルメニア・カトリックに対するロシア帝国の重層的な思考過程を重点的に考察する。

## 2. 手法

史料面では、ロシア国立歴史文書館の史料を主に用いる。本研究で使用する史料には、帝国内部におけるアルメニア・カトリックに関するやり取りやアルメニア・カトリック教徒自身の嘆願書が保管され、詳細な帝国内部の交渉を読み取ることができる。

## 3. 調査結果

1877-78年のロシア・オスマン戦争によりアルメニア・カトリックのアルトヴィン主教管区（現在のトルコ北東部・ジョージア南西部）にあたる地域がロシア領となった。1880年におけるロシア帝国と教皇庁の事前合意では、アルトヴィン主教管区の「維持」などが確認された。本合意の形成にあたり、帝国政府内部では事前合意を支持する外務省と、反対する内務省が争った。また、地方行政の意見も、本合意形成の過程で影響力を有した。

1886年には、内務省と地方行政が、アルメニア・カトリックの公認化を試みた。その動機は、①ローマ・カトリック側が、帝国内におけるアルメニア・カトリック教徒の子弟をローマなど帝国外にあるローマ・カトリックの教育機関に送り、彼らを「ラテン化」しようとしたことと、②（主にカトリックの）ジョージア人がアルメニア・カトリック教徒に対する「ラテン化」を試みていたことを阻止するためであった。これらの目的を達成するために、ロシア

政府は 1893 年にロシア＝アルメニア・カトリック教会法を制定し、同宗教を公認した。具体的には、アルトヴィン主教を国外に追放し、代わりに教会内部に「宗務監督局」を整備した。監督局は、ロシアにおいて全ローマ・カトリック教徒を管轄したティラスポリ司教（サラトフ）に従属することが帝国により定められたが、教皇庁が独立したアルメニア・カトリックの主教を置くことに拘ったため、帝国は教会法を施行できなかった。また、カトリックの影響力を弱めると同じ目的を共有しつつも、内務省と地方行政の意見は対立していった。

1903 年に帝国と教皇庁のあいだに教会法の実効化に関する合意が達成されたが、合意ではティラスポリ司教と宗務監督局の関係について曖昧なまま残され、実質的には帝国が教皇庁に譲歩した。帝国政府が合意に動いた動機は、内務省など中央にとって、地方行政の要求より教皇庁と妥協し合う方が容易いように思われたことであった。地方行政は、②の状況がより悪化した状況のなかで、アルメニア・カトリック独自の主教を認めるべきであると強硬に主張するようになっていた。宗務監督局長の人選に関しても、帝国は教皇庁と対立したが、結局 1909 年に教皇庁が推薦するサルキス・テル＝アブラミアンが就任した。帝国が彼を容認した理由は、内務省の翻意と地方行政の要求であった。アルメニア・カトリック教徒がアルメニア人として民族意識を高めつつあった状況下において、彼らの要望に反する人物が彼らの長に任命されれば、教皇庁と彼らの関係が悪化すると内務省は考えた。この内務省の考えは、テル＝アブラミアンの教会組織内における独裁的行動を招き、アルメニア・カトリック教徒の共同体内では新たな問題が引き起こされた。

#### 4. 考察

アルメニア・カトリックの事例では、地方行政の意見が、帝国の意思決定に大きな役割を果たした。ロシア帝国中央（内務省）は、教皇庁と地方行政双方と交渉しつつ政策を組み立てた。ローマ・カトリックの影響力からアルメニア・カトリックを隔離するための手法や、アルメニア人やジョージア人の民族意識に対処する意識が異なっていたことにより、同じ嫌カトリックの風潮を共有した中央と地方行政はすれ違うことになった（1905 年以降アルメニア人の民族意識が変化したことを中央が認めたことで状況が変わった）。19 世紀終盤の帝国史において、コーカサス地方行政がどのような役割を果たしたかについては、アルメニア使徒教会や正教会、イスラームなどその他の例も考察する必要がある。

#### 参考文献

- Амбарцумов И. В.* Армяно-католический вопрос в Российской империи в начале XX в // Христианское чтение №4, 2012.
- Толомео, Р.* Русско-ватиканские отношения и армяне-католики Кавказа (перевод С.Г.Яковенко). /Р. Толомео // Россия и Ватикан в конце XIX – первой трети XX века. /Сост. Е.С.Токарева, А.В.Юдин. М.СПб. Алетейя - ИВИ РАН, 2003.